

\*\*\*\*\*

隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第159号

-環境・農業・食べ物など情報の交流誌-

2005.05.26 (木) 発行 山崎農業研究所&編集同人

<キーワード>

環境・農業・健康・食べ物などの情報提供、高齢者と若者、農村と都市の  
交流ミニコミ誌。山崎農業研究所&『電子耕』編集同人が編集・発行。

[http://www.taiyo-c.co.jp/public\\_html/yamazaki/yama\\_index.htm](http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_index.htm)

\*\*\*\*\*発行部数 1411 部\*\*\*\*\*

---

□ 目次 □-----

<今週の提言> 小さいものは、いらぬか 小泉 浩郎

<読者の声> 今井さんから

<80才からのメッセージ> 私の徴兵検査--戦時体験(その1) 原田 勉

<日本たまご事情>

たまご屋おやじ、韓国家禽学会でシンポジウム 齋藤富士雄

<山崎農業研究所情報>

◇第117回定例研究会--海外農業・国際協力関係--速報(その2)

2. 西アフリカの乾燥地における農民の伝統的農業の変化と今後の農村開発に  
ついて--ガンビア国の農村を事例として--

--高木 茂氏(太陽コンサルタンツ)

<編集後記・同人の近況報告> 5月12日~5月25日

---

<今週の提言> 小さいものは、いらぬか

---

「市場原理の導入を回避しようとする『保護』の論理。それが農業全体の  
地盤沈下を生んでいる。農業総生産は国内総生産(GDP)のわずか1.1%。  
農業就業人口は25年前の約半分。全国の耕作放棄地は20年前の約2倍(日  
経05/5/20)」。だから、小さな農業を保護することを止め、市場原理の導入  
と競争力のある担い手に政策を限定し、国家予算を削減すべし。

多分、これが、国政と財界の考え方であり、あるいは国民の多くも、その風  
潮の中にあるのではないかと心配である。

過日、「農業白書」が発表された。ここでも、主題は、構造改革。競争力の  
ある大規模農家の選別とそれへの各種施策の集中、農産物の輸出を含め、「攻

めの農政」に転換だという。宣言は威勢がよいが、何か、生産の現場は、冷静である。冷静を装いながら、内心、農政への諦めが実情ではないかと思う。

食料・農業・農村の健全な発展は、競争力のある一部大規模農家だけが担い手ではない。効率と競争の論理だけでは、農村も農業生産も維持できないことを、長い歴史や日常の暮らしのなかでよく知っている。お互いに競い合っているが、譲り合い、助け合うことを忘れていない。力によって「攻めあう」ことでは、国民の大事なものを失うことになる。

「農業白書」は、分厚く、食料・農業・農村の将来は暗い、だから、構造改善で攻めの農政だというだけで、国民にとって、この国の食料・農業・農村が如何に大事かがよく見えない。

そこで、お勧めするのが「ジュニア農林水産白書」だ。是非読んでもらいたい。ここでは、日本農業を守っていくのは、大規模農家だけでない、規模の小さな兼業農家も、そして消費者を含めた国民全体であることをよく示している。

▽ジュニア農林水産白書

[http://www.maff.go.jp/www/hakusyo/kodomo\\_hakusyo.html](http://www.maff.go.jp/www/hakusyo/kodomo_hakusyo.html)

小泉 浩郎  
山崎農業研究所事務局長  
y.nouken@taiyo-c.co.jp

---

<読者の声>

---

-----  
●05/23 今井さんから；自然とは

どん百姓と自分はおもっていた。  
いかに、あさはか（じぶんの 能力のなさに、あきれる）、親父さんが亡くな  
っ  
て、機械のメンテひとつもできなくなり、  
田んぼも、ただ苦勞するものの対象にしかなくなってしまいつつあります。  
万博にもたずぎわっていますが、将来どうなるか、不安です。

いまつくづく自然の叡智ってなにか？色々な意味で考えてしまいます。

---

<80才からのメッセージ> 私の徴兵検査--戦時体験 (その1)

---

戦後60年を経過した。戦争知らない世代がほとんどの時代だ。「だからこそあなたがたに伝えたい」とラジオ放送でも投稿を呼び掛けている。私もラジオに応じて投稿しているが、それと同時に、「電子耕」でも私の体験を戦時中から戦後にかけて連載したい。

前に「戦争語り継ぐ」という企画(2003.1.9.『電子耕』100号記念)

<http://nazuna.com/tom/war/>

で、私の軍国少年時代から敗戦までをホームページに掲載したが、今回の連載はその補足である。

私の徴兵検査は、1944年、昭和19年5月、中島飛行機の試運転工をしていたときであった。満20歳で受けるべき検査が1年繰り上げられて、この年から満19歳の徴兵検査になった。同時に2年分の徴兵となったわけである。戦局はそれだけ逼迫していた。

検査は本籍地、熊本県本渡町で行われ、性器・肛門まで調べられた上、査定は「原田勉、第三乙種合格」であった。結核の既往症があったためである。

甲種合格が最適で、乙種、丙種までが合格。

太平洋戦争中には、丙種まで召集の対象になり、しまいに満17才まで徴集。いわゆる根こそぎ動員が行われた。40歳前後までも召集され、多くの妻子ある男性が戦死するという悲劇を生み出した。

――

<★参考リンク>日本の徴兵制・徴兵検査に関しては、

松山大学法文学部田村譲教授のホームページ

<http://www.cc.matsuyama-u.ac.jp/~tamura/>

日本の徴兵制

<http://www.cc.matsuyama-u.ac.jp/~tamura/tyoheisei.html>

によくまとめられている。

――

私に白紙の召集令状（現役徴集）が来たのは、昭和 19 年 11 月中旬。「十二月一日午後二時、熊本市歩兵十三聯隊ニ参着スベシ」というものであった。

熊本では受付だけで、実際に入隊したのは、四国・松山の第三航空教育隊だった。航空機の整備兵・通信兵養成の軍隊のはずであったが、航空機やエンジンの見本もないという状態であった。

そこにあるのは精神教育と、肉弾戦に備える、歩兵の訓練と内務班生活だけであった。毎晩のように気合いを入れられ、鉄拳制裁を行うという死ぬための訓練であった。内務班は定員の 2 倍、1 班 48 名という過密状態であった。1 中隊 300 名が同期の戦友であった。

12 月に入隊して翌年の 2 月末には一期の検閲を終えて外地に送り出すという短期教育だった。

短期間に、天皇陛下のために死ぬこと「一、軍人は忠誠を尽くすこと本分とすべし」（軍人勅諭）と教えられ、その他に自由にものを考える人間の性質までも骨抜きにする教育だった。

時局の戦況も知らされず、前途に絶望して自殺を考える者も現れた。同期の初年兵は、何とか現状の内務班生活から脱出するため、転属を望むようになり、早く外地へ行きたいと願っていた。

こうした状況の中に、一期の検閲を終えて、初年兵は二等兵から一等兵に進級し、大部分の一等兵は、満州やビルマ戦線に送られるために朝鮮に出発した。

戦後わかったことは、ビルマに行く途中、輸送船がアメリカ潜水艦にやられ、海没したり、輸送途中で伝染病が発生し、朝鮮にとどまり、敗戦を迎えた戦友もいた。こうして戦友の大半は、生きて故郷に帰ることができなかった。

---

<★参考リンク>ほぼ同時期に第三乙種合格で徴兵された斉藤太一さんの青春期にも同様の記述があります。

「インテリアビジネスニュース」

<http://www.ibnewsnet.com/>

から、インテリア産業人列伝

: トーソー会長斉藤太一さんの「人生にユーモアを」 青春期（3）

<http://www.ibnewsnet.com/reading/news/yumoa/yumoa4.3shou.htm>

----

私は、一等兵になると同時に幹部候補生試験に受かって、内地に残り、幹部候補生教育を受けることになった。

この時から原田一等兵は、原田候補生と呼ばれるようになった。

(次回は、幹部候補生の体験を執筆予定です。)

<参考資料>

いづれも岩波新書

大江 志乃夫 (おおえ・しのぶ) 著『徴兵制』1981年1月発行 品切重版未定

<http://www.iwanami.co.jp/BOOKS/42/8/4201430.html>

三國 一朗 著『戦中用語集』定価 777円 (本体 740円 + 税 5%)

1985年8月発行 (2005年7月21日ごろ重版でき)

<http://www.iwanami.co.jp/BOOKS/42/4/4203100.html>

<★関連情報>

\*内務班生活については、野間 宏の実体験をもとにした小説『真空地帯』によく描かれているが、1952年に独立プロにより映画化された作品が最近DVDで発売されている。

●『真空地帯』DVD 発売日 2004年8月27日

定価 (税込) 4,935円 モノクロ 129分

商品番号 ADE-0358 発売元 新日本映画社

販売元 エースデュースエンタテインメント

監督 山本薩夫 <映像特典>山田洋次、西村晃インタビュー

◆独立プロ名画特選 DVD

<http://www.space-sarou.co.jp/df/>

<http://www.space-sarou.co.jp/df/story1.htm>

山崎農業研究所会員・『電子耕』編集同人

原田 勉

<http://nazuna.com/tom/>

★印部分挿入：原田太郎

---

<日本たまご事情> たまご屋おやじ、韓国家禽学会でシンポジウム

---

脳卒中のリハビリと称してかれこれ4年間ぶらぶらしてしまった。この生活がすっかり気に入ってしまい、当分抜け出しそうにもない。あるいはこちらの生活のほうが面白いから、元の仕事の生活には戻れないのかもしれない。又うるさいからもう仕事に帰ってくるなど若い連中の声が聞こえないでもない。

脳卒中をやって一つ困ったことが起きた。今までどちらかと言えば人前で話しをすることが好きなほうであった。おっちょこちょいだから頼まれれば何処へでも飛んでいった。漫談ではあるが、興に乗れば一時間でも二時間でも原稿無しで喋っていた。ところがである。

病気をしてからこれがすっかり駄目になった、ほんの短い話でも原稿無しには何も出来ない、多分脳の回路がいかれて話を組み立てることが出来ないのであろう。

恥を忍んで何度となくこれにチャレンジしてみたが、話が詰まって立ち往生することが多かった。他人にはいい迷惑だが、これを繰り返している間に少しずつ回路が繋がって来た。

こんな時に韓国家禽学会のシンポジウムの話があった。まわりが「よしなさい」と言うのに引き受けた。その時の原稿が

<http://www.ikn.co.jp/hiroba/oyaji/oyaji%20f.htm>

にある。ご用とお急ぎでない方は見てやってください。

つかえながらもどうやらシンポジウムを終えたのだが、途中倒れなかっただけでも儲けものと後でかかりつけの医者に叱られた。

齋藤 富士雄

(株) 愛鶏園

<http://www.ikn.co.jp/>

---

<山崎農業研究所情報>

---

◇第 117 回定例研究会—海外農業・国際協力関係—速報（その 2）

2005 年 5 月 7 日 太陽コンサルタンツ会議室 20 名参加

〔講演要旨〕

2. 西アフリカの乾燥地における農民の伝統的農業の変化と今後の農村開発について—ガンビア国の農村を事例として—  
——高木 茂氏（太陽コンサルタンツ）

1. はじめに

サハラ以南のアフリカ諸国（セネガル、ガンビアなど）では食料供給能力は年々低下の傾向にある。西アフリカでは環境破壊、砂漠化の進行が著しい。この原因の多くは欧米諸国による、かつての奴隷貿易および 1960 年の独立までの植民地化による農地生態系の劣化による伝統的農業の崩壊による。この実態を調べて今後の持続的発展の方向性を探りたい。

2. アフリカの主食

西アフリカではコメを主食とする地域は限られてきた。現在でも農村部ではコメ以外のイモ、雑穀が主食である。落花生は奨励され、多くが落花生畑に変わってきた。これがいま農地利用・開発のネックであり、従来からの地力回復としての休閑耕作システムを壊して（農地休閑）→（休閑期間の短縮）→（農地劣化）→（収量の伸び悩み）の悪循環となっている。最近は降雨量が少なく、収量は減少している。食料の増産には水を確保することで稲作を考えている。（年降水量 600～800mm）

3. 伝統的食糧生産の基盤の喪失

ガンビアの隣国セネガルではフランス植民地時代は食用油の原料に落花生を作った。伝統農業の農地は減る、その分を仏領インドシナからコメが輸入された。その他小麦などを海外からの輸入システムを持っていた。これは独立後も引き継がれている。ガンビアの食糧はセネガルに頼っているのでこの影響下にある。

4. 農民の知恵と戦略

気候変化による降雨の減少、人口増加、遊牧民族の流入によって砂漠化は進む。そこで伝統的な知識に基づいた地域資源の活用、リスク回避策のためにアフリカの将来展望としての農業の方向が求められている。

## 5. 農民による地域資源の伝統的利用方法

- 1) 「焼き畑と遊牧」、「ブッシュ休閒システム」、「集約的複合自給システム」「氾濫原農業」がある。このなかで「ブッシュ休閒システム」（数年耕地利用後、低木林状態で数年休閒させる）が多いが、人口増大で休閒期間が極端に短くなる。その結果、土地がやせる。手間のかからぬキャッサバなどが作られる。
- 2) 栽培様式と家畜による肥培管理：主要作物はミレット、ソルガム、メイズ、落花生、ササゲ、ゴマ、サツマイモ、キャッサバ、ヤムイモなどである。単品、間作、混作といろいろある。いずれも輪作体系に従っている。ガンビア農村では肥料は牛糞と作物残渣の堆肥を施用している。5～6年連続栽培して1年休閒または、省略している農家、あるいは化学肥料一辺倒のところもある。ガンビアのトゥーバ村では休閒させずに連続栽培、マンサジャン村では6年のうち2年間を休閒している。
- 3) 過去十年の土地利用パターンでは単作が多い。肥培管理は家畜飼育による糞尿で十分と考えている。
- 4) 樹木植生の利用実態：農村部では樹木は家畜飼料、自家食料、燃料などに用いられる。マメ科のアカシアは土地を肥やしている。

## 6. 今後に向けて

西アフリカの伝統的技術を見直し、崩壊しつつある営農の改善、地域資源の管理手法を樹立して持続的な農村発展の可能性をさぐるための問題提起をした。今後この農村開発を研究課題としたい。（文責：安富六郎）

---

<編集後記・同人の近況報告> 5月12日～5月25日

---

「食・農・環境は三位一体」。わたしの大好きな言葉だ。山下惣一さんの『ザマミロ！農は永遠なりだ』に出てくる。<今週の提言>で小泉浩郎氏が紹介されているように、「農業総生産は国内総生産（GDP）のわずか1.1%」か  
もしれないが、そのたかだか1.1%でしかない農が食のみならず環境を支える要  
になっているのはすごいことである。

農業が農業生産を行なうなかで生み出すもののうち、農産物以外のものを

“多面的機能”とよぶ（水をたくわえきれいにすること・生き物が育つ場を提供すること・やすらぎをもたらす景観等々）。国内総生産の1.1%でしかない農  
は、その1.1%の枠に収まるものでは決してない、ということの説明付けである  
と言ってもよい。

2000年に公布された食料・農業・農村基本法の特徴のひとつが、この多面的機能への着目であった。あれから5年、巷にあふれる農業保護批判の論調を聞いていると、議論の水準は数段下がっているように思う。

山崎農業研究所会員・田口 均

---

◎お願い「<読者の声>の投稿規定・メールの書き方」

---

- 1、件名（見出し）を必ず書いて下さい。「はじめまして」は省略して、言いたいことを具体的に。
- 2、氏名・ハンドルネームは、文末ではなく始めのほうに。
- 3、1回1テーマ、10行位に。
- 4、ホームページを持っている人は、文末にURLを。
- 5、JIS X0208 規格外の文字（機種依存文字）のチェックを。

<http://www.chem.sci.osaka-u.ac.jp/networks/check/jisx0208.html>

インターネットで使えない丸数字や半角カタカナ、括弧入り略号などは文字化けの原因です。

---

◎投稿アドレス変更のお知らせ

---

電子耕への投稿アドレスは、発行人の変更に伴い、

[y.noken@taiyo-c.co.jp](mailto:y.noken@taiyo-c.co.jp)

となっております。投稿される方はこちらのアドレスをお願いします。

-----  
次回 160号の締め切りは6月6日、発行は6月9日の予定です。

---

★『メールマガジンの楽しみ方』発売中

---

書名：岩波アクティブ新書 45 『メールマガジンの楽しみ方』

著者：原田 勉 定価：735 円 発行日：2002 年 10 月 4 日

発行所：岩波書店 ISBN4-00-700045-X

まえがき・目次・著者紹介・注文方法はこちら

<http://nazuna.com/tom/book.html>

---

『電子耕』から大切なお知らせ

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

[http://www.taiyo-c.co.jp/public\\_html/yamazaki/yama\\_mailmag.html](http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag.html)

<本誌記事の無断転載を禁じます>

\*\*\*\*\*

隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第 159 号

バックナンバー・購読申し込み／解除案内

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

[http://www.taiyo-c.co.jp/public\\_html/yamazaki/yama\\_mailmag2.html](http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag2.html)

2005.05.26（木）発行 山崎農業研究所&編集同人

<mailto:y.noken@taiyo-c.co.jp>

\*\*\*\*\* ここまで『電子耕』 \*\*\*\*\*